

定理 2.6 (Doob の任意抽出定理-離散時間)

$\{X(n)\}$ を (\mathcal{F}_n) -マルチンゲールとすると T が確率 1 で有限な (\mathcal{F}_n) -停止時刻なら $X(T \wedge n, \omega) = X(T(\omega) \wedge n, \omega)$ は (\mathcal{F}_n) -マルチンゲールでもあるし, $\mathcal{G}_n = \mathcal{F}_{T \wedge n}$ -マルチンゲールでもある.

さらに, T, S が $T \geq S$ を満たす有界な (\mathcal{F}_n) -停止時刻なら

$$E(X(T) | \mathcal{F}_S) = X_S \quad a.s.$$

証明 まず, T が有界な (\mathcal{F}_n) -停止時刻のとき次の式が成り立つことに注意しよう. $T \leq N$ とする.

$$X(T(\omega), \omega) = X(0, \omega) + \sum_{n=1}^N 1_{\{T \geq n\}}(\omega) (X(n, \omega) - X(n-1, \omega)).$$

$\{T \geq n\} = \{T \leq n-1\}^c \in \mathcal{F}_{n-1}$ であるので, $k \geq n$ ならば

$$E(1_{\{T \geq n\}}(X(n) - X(n-1)) | \mathcal{F}_k) = 1_{\{T \geq n\}}(X(n) - X(n-1))$$

また, $\{T \geq n\} = \{T \leq n-1\}^c \in \mathcal{F}_{n-1}$ だから,

$$E(1_{\{T \geq n\}}(X(n) - X(n-1)) | \mathcal{F}_{n-1}) = 1_{\{T \geq n\}}(E(X_n | \mathcal{F}_{n-1}) - X_{n-1}) = 0.$$

さらに, $k < n-1$ のときは任意の可積分な Y に対して

$$E(Y | \mathcal{F}_k) = E(E(Y | \mathcal{F}_{n-1}) | \mathcal{F}_k)$$

である. これは定義 2.1 により, 任意の $B \in \mathcal{F}_k$ に対して,

$$\int_B Y(\omega) P(d\omega) = \int_B E(Y | \mathcal{F}_{n-1}) P(d\omega) \quad (2.3)$$

ということと同じである. (条件付き期待値の tower property と呼ぶ性質である.)

これより, $B \in \mathcal{F}_k \subset \mathcal{F}_{n-1}$ に注意すれば, 定義 2.1 により (2.3) は明らかに成り立っている. Y として $1_{\{T \geq n\}}(X(n) - X(n-1))$ を取ると, $k \leq n-1$ のとき

$$E(1_{\{T \geq n\}}(X(n) - X(n-1)) | \mathcal{F}_k) = E(E(Y | \mathcal{F}_{n-1}) | \mathcal{F}_k) = 0$$

となり,

$$\begin{aligned} E(X(T) | \mathcal{F}_k) &= \sum_{n=1}^k 1_{\{T \geq n\}} (X(n) - X(n-1)) \\ &= \begin{cases} X(k, \omega) & k \leq T(\omega) \text{ のとき,} \\ X(T(\omega), \omega) & k \geq T(\omega) \text{ のとき,} \end{cases} \\ &= X(T \wedge k) \end{aligned}$$

となるが, 最初から T の代わりに $T \wedge n$ を使うと左辺は $E(X(T \wedge n) | \mathcal{F}_k)$ となり, 求める式を得る. $X(T \wedge n)$ は $\mathcal{F}_{T \wedge n}$ -可測であり, $\mathcal{F}_n \supset \mathcal{F}_{T \wedge n}$ だから条件付き期待値の tower property により, $n \geq k$ のとき

$$E(X(T \wedge n) | \mathcal{F}_{T \wedge k}) = E(E(X(T \wedge n) | \mathcal{F}_k) | \mathcal{F}_{T \wedge k}) = X(T \wedge k)$$

となる.

後半の主張を証明しよう. $T \geq S$ となる有界な (\mathcal{F}_n) -停止時刻 T, S を考える. $T \leq N$ としておく. 示すべき式は任意の $A \in \mathcal{F}_S$ に対して

$$\int_A X(T, \omega) P(d\omega) = \int_A X(S, \omega) P(d\omega) \quad (2.4)$$

という式である. 左辺を S の値で分解して

$$\sum_{j=0}^N \int_{A \cap \{S=j\}} X(T(\omega), \omega) P(d\omega).$$

$A \cap \{S=j\} \in \mathcal{F}_j$ だから, 前半で示したように

$$\int_{A \cap \{S=j\}} X(T(\omega), \omega) P(d\omega) = \int_{A \cap \{S=j\}} X(T(\omega) \wedge j, \omega) P(d\omega)$$

$S \leq T$ なので $S=j$ のとき $T \wedge j = j = S$ となり, 右辺は

$$\int_{A \cap \{S=j\}} X(S(\omega), \omega) P(d\omega)$$

に等しい. これは (2.4) が正しいことを言っている.

2.2.1 Doob-Meyer の分解定理

定義 2.4 フィルトレーション (\mathcal{F}_n) が与えられているとき, 可積分な確率変数列 $\{X(n)\}_{n \geq 0}$ が $\{\mathcal{F}_n\}$ -劣マルチンゲールであるとは, 任意の $n \geq 0$ に対して

$$E(X(n+1) | \mathcal{F}_n) \leq X(n) \quad a.s.$$

を満たすときに言う. また, $\{-X(n)\}_{n \geq 0}$ が (\mathcal{F}_n) -劣マルチンゲールであるとき, 上の不等式は逆向きになるが, このとき $\{X(n)\}_{n \geq 0}$ は (\mathcal{F}_n) -優マルチンゲールであると言う.

定理 2.7 (Doob-Meyer の分解定理)

$\{X_n\}$ が (\mathcal{F}_n) -劣マルチンゲールであるならば

$$X(n) = M(n) + A(n) \quad (2.5)$$

という分解が任意の $n \geq 0$ で成り立つ. ここに $\{M(n)\}$ は (\mathcal{F}_n) -マルチンゲールであり, $\{A(n)\}$ は $A(0) = 0$ を満たす単調非減少な確率過程で, 任意の $n \geq 1$ に対して $A(n)$ は \mathcal{F}_{n-1} -可測である. これを $\{A(n)\}$ は (\mathcal{F}_n) -可予測と言う. この分解は一意的である.

この定理により, 劣マルチンゲールも本質的にはマルチンゲールと扱いはそんなに変わらないことが分かる.

Doob-Meyer の分解定理の証明 アイデアはマルチンゲール $M(n)$ を無理やり作ってしまうというものである.

$$M(n) = X(0) + \sum_{j=1}^n (X(j) - E(X(j) | \mathcal{F}_{j-1}))$$

と置く. $M(n)$ は \mathcal{F}_n -可測であり,

$$M(n+1) = M(n) + X(n+1) - E(X(n+1) | \mathcal{F}_n)$$

とかけるので,

$$E(M(n+1) | \mathcal{F}_n) = M(n).$$

よって $\{M(n)\}$ は (\mathcal{F}_n) -マルチンゲール.

$$X(n) - M(n) = \sum_{j=1}^n (E(X(j) | \mathcal{F}_{j-1}) - X(j-1))$$

となる。右辺を $A(n)$ と書くと, $A(n)$ は \mathcal{F}_{n-1} -可測である。さらに, $A(0) = 0$ で, X_n が劣マルチンゲールなので,

$$A(n) - A(n-1) = E(X(n) | \mathcal{F}_{n-1}) - X(n-1) \geq 0$$

となり, $A(n)$ は単調非減少。

最後に, 分解 $X(n) = M(n) + A(n)$ が一意であることを見る。

$$X(n) = M(n) + A(n) = N(n) + B(n)$$

と分解できたとする。 $M(n), N(n)$ はマルチンゲール, $A(n), B(n)$ は可予測な単調非減少過程とする。このとき

$$M(n) - N(n) = B(n) - A(n)$$

から, 右辺は \mathcal{F}_{n-1} -可測となり, マルチンゲール性から

$$M(n) - N(n) = E(M(n) - N(n) | \mathcal{F}_{n-1}) = M(n-1) - N(n-1)$$

これを繰り返して

$$M(n) - N(n) = M(0) - N(0) = B(0) - A(0) = 0$$

を得る。よって $M(n) = N(n), A(n) = B(n)$ となる。

任意抽出定理は劣(優)マルチンゲールへの拡張を持つ。直接証明もできるが, ここでは Doob-Meyer の分解定理を使って証明しておこう。

定理 2.8 $X(n)$ が (\mathcal{F}_n) -劣マルチンゲールの時, 任意の有界な (\mathcal{F}_n) -停止時刻 T, S に対して $T \geq S$ a.s. のとき

$$E(X(T) | \mathcal{F}_S) \geq X_S \quad a.s.$$

証明 $X(n) = M(n) + A(n)$ と分解する。 $M(n)$ はマルチンゲール。 $A(n)$ は単調非減少なので, $A(T) \geq A(S)$ したがって任意抽出定理により

$$E(X(T) | \mathcal{F}_S) \geq E(M(T) + A(S) | \mathcal{F}_S) = M(S) + A(S).$$